

# 植民地文学としての

## 吳濁流

### の

## 文学

鍾  
肇  
政

人も知る、吳濁流氏は台湾での植民地文学の最も特色ある代表的作家の一人である。晩近、日本ではその経済方面における雄飛に伴い、かつての日本植民地政策の再検討の気運がさかんになり、吳氏の文学が日本の植民地統治の実態を最もよく反映するものとして、今一度花道を通り、晴れの檜舞台に躍り出た。それが『吳濁流選集』第一巻・第二巻と銘うった『泥濘に生きる——苦悩する台湾の民』（以上何れも社会思想社。一九七二年）の二冊と『アジアの孤児——日本統治下の台湾』（新人物往来社・一九七三年）等の顯刻の運びとなつたのである。

この三巻は吳濁流文学の全部を網羅したものでは勿論ない。吳氏の作品は小説の外、エッセイに随筆に紀行に、縦横無尽にペンを駆り、可成りの量に上る。それに無慮二千首に近い漢詩がある。が上述の三巻からでも吳氏の文学の真髓がうかがえるのは言うまでもない。

今日、ややもすれば日本の台湾統治は、少くとも台湾近代化の基礎を造つたものとして、根本的には良い事をしたのだ、と思つている人があるようである。だが、日本の台湾における植民地体制というものは、そんなに甘かつたであろうか。台湾は日本の植民地政策のもとで、近代化の第一歩を踏み出したことは、或いは否めないかも知れない。がそれはあくまで日本がこの島で行なう全般的な収奪の為の便法でしかなかったのである。この点、晩近以来各方面からの厳正なる検討が加えられ、もはや誰も疑わない所であり、固より筆者がここで喋々する要は更にないのである。殊に植民地体制に置かれた人間、及び人間関係は、どのように歪められたものであるか。これは龐大なる文献の分析、研究から我われは伺い知る事が出来ないものである。吳濁流文学はこの間の機微を表して余す所がない。吳氏の作品が今一度脚光を浴びて、日本の読書界にクローズアップされる所以も、まさにここにあるのではないかと思われる。

日本の台湾統治は一八九五年に始まり、一九四五年の八月十五日、日本の敗戦と共に終止符をうつ。この五十年にわたる植民地としての台湾は、歴史の上に如何に位置づけられるが、今もって完全な整理が行なわれていない。上

述の検討も、現段階では単なる検討でしかないようである。そして今や三十年を越す歳月が過ぎ去ったのである。

あの五十年間は一体何であったのか！現今、初老前後以上の年輩者の脳裏にかすかに残る、モコたる記憶でしかなかったのではあるまいか。

然り、年輩の人たちにとって、それはもはや一場の悪夢でしかない、遠い、忘却の彼方へ消えさりつつある古きでしかない。そして少壮年輩以下の人たちには、僅かに古老の口からか、或いは書物から得た大ざっぱな概念しかない。だが、事實は儼として存在するのである。それを我われは呉氏の文学から、まのあたりに見、生々しい当時の息吹きを汲みとるが出来るのである。

日本は明治維新と共に、近代化の歩みをふみ出した。近代化は、百年前の世界においては、とりも直さず、富国強兵策であり、領土拡張策でもあった。そしてその矢面に立たされたのが、眠れる獅子といわれた中国とその四億に及ぶ民衆だった。日本は、その対外戦争として手はじめに日清戦争をし、台湾という最初の植民地を獲得したのである。

近代化を誇る日本軍の精銳は、戦勝の余勢をかって台湾北部に上陸した。そしてそこに待っていたものは何であったか。もはや朝鮮半島や大陸東北部で銃声をきくとすたこらさと踵を反す「清朝兵」ではなかったものである。それは同じく弁髪をたらし人たちはあったが、彼等は手に手にくわや鎌を取り、鳥打ちの先ごめ式火縄銃を執って立ち上った台湾の土百姓たちであった。そして又、彼等は烏合の衆でもあった。が日本軍の精銳は近代化兵器を持たない人たちにどれだけ手こずった事か。澳底に上陸してから台南に至る四百キロそこそこの道を進むのに何と二百日近くかかり、而も多大なる出血と犠牲を払ったのである。

この台湾の土百姓たちはむろん漢民族の末裔である。そして彼等は又、漢民族のうちでも、恐らく最も進取の気象に富んだ部類である。何故なら、彼等のもと黄河流域に住んでいたのであるが、北方からの胡人の大挙侵入にあり、勇敢に抵抗し、刀折れ矢尽きて、南遷を余儀なくされたものである。彼等は、異民族の支配の下で「順民」となる事を潔きよしとしなかった人た

ちである。彼等の流浪の足あととは、殆んど四百余洲に及んだ。その一部は福建や広東に至り、又その中の一部は台湾に移民したのである。彼等は不屈の伝統を誇る、生粋の漢民族だったのである。

この台湾の土百姓たちの武力抗日ゲリラは、日本軍の台南入城後間もなく一応収まったが、その後も間歇的な武装蜂起は断え間なく続けられ、「腥風血雨」の事件が相ついたのであるが、一九二〇年代になって、所謂大正デモクラシイの幕明けの時代に入り、そして加うるに中国大陸に起った五四運動の余波が台湾にも及び、この熱血溢れる台湾の人たちは漸やく武装蜂起の無意味なる事を覚り、以後は六三法案撤廃運動や台湾議會設置請願運動等、法理に則した平和な抗日運動に一変したのである。

又、このような運動に身を投じて積極的に活躍する事はなくても、詩に托して、異民族である支配者に対する反抗の心情を唱い、意志を表現した文人墨客も数多あった。これらの漢詩人は全島各地に詩社を設け、詩会の集いを営み、中には弁髪を残し、伝統的な台湾衫を着用して、支配者に無言の抵抗を示したのもあった。

むろんこれらの台湾の土百姓たちは、皆が皆如上のような闘士ばかりであったのではない。早くは日本軍を案内して同胞を殺させ、以後大漢奸（台湾の漢奸だから台奸ともいふべきか）になりお世話したもの、或いは支配者に傾使される小吏（例えば巡査補とか、政府の下級官吏等）になつていばかりしたもの、また日本人と交を結ぶことを名譽とし、郷党父老にひけらかすもの等等、何れも一己の榮達を計るにいとまなかった人たちである。

それが日本統治の後期（大よそ一九三五年以後）に至って、事態は又一変する。つまり奴隸式日本教育がだんだん普及し、盧溝橋事変以後は更に皇民化運動の火蓋を切り、奴隸教育は軍国主義教育にまで発展し、彼等の母語である福建語、広東語（正しくは閩南語・客家話）までが収奪の憂目に逢うのである。そして日本敗戦・台湾光復に至るまでの数年間、あらゆる事柄が統制を受け、弾圧を受けた事は言うまでもない。

以上の事がらを本にして呉濁流氏の年譜を見ると、大よそ次の事が分る。

呉氏の誕生は一九〇〇年、日本の領台の第五年目にあたり、呉氏は日本軍来台当時の熾烈な抗日戦争は直接に知る事が出来なかったのであるが、あのゲリラ戦生残りの勇士が隣り近所等にいくらでも健在であった事、従ってこの古老たちからいろいろ話をきいているのは呉氏の作品からも伺い知る所である。

次に呉氏は寺子屋式の書房教育を経て公学校に入り、日本教育を受けるのであるが、師範学校を卒業して、公学校教諭に任官されるのが一九二〇年、満廿歳の年である。時あたかも大正デモクラシイの曙光がさし始め、大陸では五四運動の余燼がまだ燃えており、台湾にも飛火して、世をあげてデモクラシイとナショナリズムの叫びが高かりし頃である。

その後、呉氏は教育に携わるのであるが、年譜からも分る通り、左遷又左遷の憂目にあっている。理由は例えば発表した教育論文が過激であったとか、校長に何々を抗議したとか、挙句の果ては、郡視学が運動会で教員を侮辱したのに憤慨したとかで、勤続二十年目、勲八等に叙せられると同時に「依願免本官」になっている。一九四〇年の事で、「支那事変」たけなわの頃、大東亜戦争が勃発する前の年である。翌年呉氏は大陸に渡り、新聞記者等をして約一年間滞在の後、台湾へ戻った。それから、戦時体制の産物である米穀組合に就職したりして、終戦の時は台湾新報のジャーナリストであった。

光復後、氏はいろんな職についているが、詳しい事は、ここでは敢えてふれない事にしたい。だが如上の氏の経歴、及びその作品に現われる氏の分身とも見られる作中人物からも伺えるのであるが、氏は温情裕かな人である反面、不正と邪悪には目をそむく事が出来ない、殊に正しいと所信する所は、敢えて体制側にくっつかかる事をも辞さない鉄血の反骨の士でもある。これは又氏の一貫した、そして老いて益ます盛んなる気骨でもある。氏は畢竟ずるに中原民族の血をひいた闘志燃ゆる生粋の漢民族・客家人だったのである。(私見によれば、氏は正に時には些さか氣力に欠くる所があり、時には果敢に挑む所がある典型的な台湾の客家人だと思ふ。氏の人となり及び作中人物からこのような台湾客家人氣質を分析して行けば面白いと思ふ)

であるが、これだけで僅に一篇を成すと思われるので、又の機会に回したい。

呉氏の文学は大むね植民地文学だといえる事は、もはや議論を挟む余地がないものと見られている。これは氏の前期作品にしる、後期の最近執筆済みの『台湾連翹』にしる、言える事であると思ふ。

以下、植民地文学の白眉と見なされる氏の代表作『アジアの孤児』により氏の文業の一斑を見ていきたい。

タイトルが示すように、本篇のヒーロー胡太明に代表される台湾人の祖国に見放され、統治者側の日本からは継子あつかい、いな、奴隷扱いというべきであろう、にされる孤児意識をテーマにしている。胡太明は台湾北部の山あいのある旧家の生れ、始めは書房に入れられ、漢文を習ったのであるが、その後町の公学校に通い、師範学校に進み、新しい教育を受ける。卒業後任官して田舎の公学校に赴任するが、ここで始めての日本人女性内藤久子に出逢う。この慕情は、彼が台湾人なるが故に当局の忌む所となり、彼女は転勤させられる。加うるに権力者側は「一視同仁」なる大義名分をにかけているにも拘らず、実際は台湾人に対する差別待遇がひどく、胡太明はついに植民地社会の矛盾に堪えられず、始めて孤児意識にさいなまれるのである。彼は退官し、日本へ留学。しかしそこも彼にとっては安住の地ではなかった。留學生仲間には政治の圧制に対する抵抗の意欲が渦まき、自治を望む要求が政治的実践へと彼らをかりたてていた。無氣力な胡太明はこのような世界に馴染めず、己むなく学問の分野へと逃避するのである。

卒業後、胡太明は故郷へ帰り、友人の農場で働くのであるが、程なく大製糖会社の悪辣な搾取で農場はつぶされ、胡太明はいよいよ意を決して大陸へ渡った。そしてそこで淑春という女性と結ばれるのであるが、この派手好きで開放的な新時代の大連女性には又もや胡の悩みの種となった。時あたかも日本の侵略政策が尖鋭化した頃で、両国間は風雲急を告げ、多くの友人たちは抗日戦線に馳せ参するのであるが、胡太明は相変らずそのような行動に踏み切れない。その中にあられもないスパイ嫌疑を受け、逮捕されてしまった。

彼の心の底は、孤児意識がもはや概念だけでなく、身をつんざくような切実さを加えて来たのである。幸いに昔の教え子に助けられ、脱出することに成功し、心に深いきずを負って台湾へもどった。しかし故郷で待っていたものは尾行する刑事たちの監視だった。

やがて日本の対華侵略が全面化し、広東作戦が開始されると、彼は要注意人物として強制的に動員され、通訳として戦場へ送り出される。そこで彼は善良そのものな日本兵士が中国娘を犯し、暴行後銃殺した話を平然として話しあっているのを耳にして、戦争の悲惨さを知ると同時に、その加害者の一人として動員されている自分の立場を思い知らされた。そして若い抗日戦士が殺されるのを目撃し、精神錯乱のまま送還される。

だが台湾は「聖戦遂行」に名をかりた皇民化運動の坩堝と化し、銃後の安らかさは微塵もない。台湾の若者たちは次々に戦場へかり出され、それまでの経済的搾取にくわえて露骨な精神の破壊と苛烈な労力搾取までが強制されているのだった。胡太明は一時統制機関の付属団体に就職したのであるが、一方日本人の進歩分子と組んで雑誌を発刊、現実の暴露につとめるが、むろん長くは続かず、弟が強制労働の結果、悲惨な死を招いたことから、否応なしに問題との対決を強いられ、これまでの生きかたを反省し、誠実に生きたつもりでありながら結局は現実との妥協に終っていたことが分り、自責の念にたえかねて、やがて発狂してしまう。(以上の『アジアの孤児』の梗概は概ね滝川勉著『植民地統治下の台湾民衆の諸相』に依る)

『アジアの孤児』は一九四三年から四五年にかけて執筆された作品である。四三年といえば大東亜戦史を調べるまでもない、筆者には記憶今なお新たなる、アッツ島玉砕、ガナルカナル島転進等に始まる形勢逆転の年である。そして言うまでもなく、四五年は終戦の年である。その間、サイパンの失陥を手始めとして、マニラ、硫黄島と次つぎに落され、その次は台湾に来るだろうか、それとも琉球か、又は香港か、正に人心惶々として戦っていた時期であった。

呉氏は本書の自序に言う

「しかし、筆者はその恐怖よりもこの小説を完成しなければならぬ衝動にかられたのである。当時、筆者の住んでいる家の前には北警察署の官舎がずらりと並んでいた。その中には顔見知りの特高も二三人いた。この小説の第四篇、第五篇を書くのにすこぶる都合の悪い所で、したがって練まざるを得ない。しかし、案外、燈台もと暗しで、かえって安全だと思って別に場所を換えなかった。けれど万一の場合にそなえて、細心の注意だけは払って置いた。二、三枚書いては勝手の炭竈に隠し、これがたまると田舎の故郷へ疎開するようにした。今となってみれば何となく馬鹿ばかしい感じもするが、当時は実にうっかりできない時代で、発見されたら最後、事のよし悪しを問わず、直ちに反逆者か反戦者として簡単にたたずけられてしまうのであったらう。」

つまり呉氏は生命を賭して、この大作を書きつづけたものである。呉氏は本書によって、如何なる問題を提起したのであるか？曰く、台湾人は一体何であろうか、という事である。

今日、台湾人は何であろうか、ときくことはナンセンスである。が呉氏の問題提起の時点においては、これは多くの台湾のインテリの脳裏を常に去来する重大な問題だったのである。むろん人たちは自分が漢民族の末裔である事は心の中で承知している。しかし現実には大日本帝国臣民である、いや、であることを強いられている。陰にまわれれば、台湾人同志で「内地人」(つまり日本人である)を「狗仔」又は「四脚仔」と呼ぶ、そして僅かに優越感を味わうのである。これは卑劣な根性であったらうか？否、抗がうべくもない強大な権力の前で、僅かに自らを慰める気持の発露である。台湾人はこうする以外に、心理のバランスを保つ手だては無かったのである。がそれでも納得すると否とにかかわらず、彼等は大日本帝国臣民なのである。

彼等の心の奥底には祖国があった。そして祖国は彼等の口もとでは「唐山」、「長山」なる表現をもって表わされていた。憧れはいつも胸の中にひめてもいた。が祖国とは何であったらう。それは大海を隔てた彼方の国である事は分っている、が詳しい事は何一つ知らない、言うなれば一つの概念に過ぎなかったのである。そしてこの祖国は、数十年前に戦いに敗けて台

湾を割譲したのである。彼等はこの事だけはよく知っていた。我われは祖国に見離された人であると。よしやごく一部分のインテリには祖国に革命が起り、大清帝国は崩潰して、民国になったのが分っていただろう。しかし民国が何であつたらう、彼等の脳裏には、それは以前あつた概念の延長点に出る、或いは両者完全に相重なるものでしかなかったのである。

では大日本帝国臣民になり切るか。如何にせん内地人は内地人であり、本島人は本島人である。日本人は常に頭の上を泥足で踏みつけにしている人たちである。逆立ちしようが、背のびしようが、到底及ぶところではないのである。一視同仁だなんて心底から信じている内地人は一人もないことを外ならん本島人の一人びとりがよく知っている。

カイロ宣言でははっきりと日本の敗戦後、中国は台湾を回収する事が規定されている。しかし海に囲まれた台湾では、又嚴重な封鎖の下では、何人がこの重大なニュースを聞き知つたであろう。よしや噂にきいても、それは信ぜられない夢物語でしかなかったのである。

台湾人は宙ぶらりんの最も哀れな民族である、これがつまり当時の台湾人の心にひそむ儼然たる孤児意識だったのである。

本書では呉氏のその他の作品に好んで扱う、土地を取奪された台湾農人の苦しみや抵抗は出て来ない。が呉氏は胡太明をして台湾から内地へ、又大陸へと空しい遍歴を試みさせる。そして老人、若もの、地主、農民、それから教員、役人と登場人物が次から次へと現れては消える。その中には買弁式、走狗式の台湾人も活躍する。そして支配者側にも台湾人の苦悩に同情をよせる進歩的な分子がいる。はては大陸における人たち、同胞であるはずなのに彼にとつてはどうしてもなじめない人たち。又あの祖国の大陸は、彼には謎にみちみちた、そして混沌の極にあつた所でしかなかったのである。

これらの、地点から言えば台湾、日本、大陸に跨がる広ばくたる場所、人間から言えば台湾人、日本人、祖国の人たち、このようなもろもろの土地と人間及びそれらが形づくる政治的、社会的事象の諸相を、呉氏は極めてイメージ豊かに、しかもごく正確に歴史の文脈のなかにとりこみながら、この人たちの生きた行動の軌跡と葛藤を描いてくれる。

胡太明は度重なるエポックに対処する毎に二の足をふむ。読んで行く中にもどかしい思いに読者はかられる。人間はかく躊躇逡巡してよいものかと思う。だが呉氏は深い刻りをもって胡太明に台湾客家人の特色たるハムレット式性格を賦与し、否応なしにこの主人公を破局へと引きずって行く。呉氏は疑いもなくいろいろな血気にはやって圧制者側に血を以て挑んだ現実の人物も聞き知っている。又呉氏自身も悲憤慷慨、時には圧制者側に理づめてくつてかかった経歴を幾多持つ。このような呉氏はそのペンをもつて熱血に満ちみちた人物をしつらえる事は朝飯前だつたであろう。が呉氏はそのようなプロットを取らない。胡太明はあくまで台湾インテリの平均的な人間像であつたと言える。そのことがこの作品に一種の現実感を与えているようである。

「呉さんの諸作品は台湾知識人が歴史を形作り、つき動かす主体として中国近・現代史の脈絡へ自らの意思で回帰するための必読文献である」

と戴國輝氏は『アジアの孤児』の巻末に付せられた解説で語っている。呉氏の文学の精髓を言い得た言葉だと思われる。

呉氏は新竹県新埔鎮の人、現今台北市に在住、もう喜寿を迎えるはずだがこの両三年内に続けて南米、東南アジア、豪洲等を視察して回り、今春は又アフリカまで出かけてきたという、カクシャぶりである。ペンも相変らず鋭い。創作の方は去年『台湾連翹』を書き了えた許り、今新作の構想をねっておられると思われる。その主宰する『台湾文藝』季刊はこの四月から十二年目に入り、通巻第五十一号を迎える。戦前派に属する台湾作家が一人残らず封筆の状況にあつて、高齢の呉氏の文学生命はまだまだ若い、今後の健筆をここで切に祈りたい。

(一九七六年四月七日、於九龍書室)

〔附記〕——呉濁氏は去る十月七日他界された。享年七十七。今後ますますの活躍を期待していただだけに痛惜の念にたえない。ここに併せて呉氏の冥福と祈る次第である。十月廿八日〕